# 令和元年度研究調査報告

## ――總持寺祖院所蔵『黄檗版一切経』予備調査報告を兼ねて――

秋津 秀彰
武井 慎悟

当研究所では、總持寺史および曹洞宗教団史に関する資料の調査と収集を行っている。近年においては、次に挙げる二点を主たる研究課題に設定し、調査・撮影に取り組んでいる。

① 列島各所に伝存する瑩山紹瑾禅師撰『伝光録』写本の調査・撮影

② 總持寺祖院所蔵資料の調査・撮影

令和元年度においては、①の『伝光録』写本調査・撮影として、昨年に引き続いて松山寺（石川県金沢市東兼六町）所蔵本の調査・撮影を行い、これを完了した。松山寺本の解題および詳細については、本紀要に収載される小島裕子「荘厳の「祖録」――松山寺本『伝光録』の意匠と加賀藩前田家の文化――」および横山龍顯「松山寺本『伝光録』の書誌と本文」において論じられている。②は、昨年度より取り組んでいる調査であるが、今年度は六月と九月の二度にわたって調査を行った。總持寺祖院（石川県輪島市門前町門前）には、一万点を超える古文書や典籍が収蔵されるが、この度の調査においては、『住山記』および各種「校割帳」を重点的に撮影するとともに、『黄檗版一切経』の予備調

査を行った。『住山記』については、昨年度に引き続いて、尾崎正善・武井慎悟「總持寺祖院蔵『住山記』について（二）」として、本紀要に一部、翻刻掲載している。また、『黄檗版一切経』についても、予備調査において新たな知見が見出されたため、小稿において報告することとしたい。

## 一、調査概要

第一回

・日程　令和元年六月十九日～二十一日

○六月十九日（水）

羽田空港集合　空路にて、のと里山空港へ

午前十時　のと里山空港着、車にて總持寺祖院へ

午後一時より四時三十分まで資料の所蔵状況調査・撮影

車にて輪島市に移動、輪島泊

○六月二十日（木）

ホテル出発

午前九時より午後四時三十分まで昼食をはさみ、總持寺祖院調査・撮影

輪島泊

○六月二十一日（金）

ホテル出発
午前九時より午後三時まで昼食をはさみ、總持寺祖院調査・撮影
午後三時　祖院出発、のと里山空港へ移動　横浜への帰路につく

調査場所：總持寺祖院（石川県輪島市門前町門前）
参加者：尾崎正善・小島裕子・横山龍顯・武井慎悟・秋津秀彰

第二回

・日程　令和元年九月十七日～十九日

○九月十七日（火）
羽田空港集合　空路にて、のと里山空港へ
午前十時　のと里山空港着、車にて總持寺祖院へ
午後一時より四時三十分まで資料の所蔵状況調査・撮影
車にて輪島市に移動、輪島泊

○九月十八日（水）
ホテル出発
午前九時より午後四時まで昼食をはさみ、總持寺祖院調査・撮影
車にて金沢市に移動、金沢泊

○九月十九日（木）

ホテル出発

午前九時三十分より午後三時まで、松山寺本『伝光録』調査・撮影

午後三時　松山寺出発、車にて金沢駅へ移動　横浜への帰路につく

調査場所：總持寺祖院（石川県輪島市門前町門前）

松山寺（石川県金沢市東兼六町）

参加者：尾崎正善・古瀬珠水・小島裕子・横山龍顯・武井慎悟・秋津秀彰

以上、武井（文責）

## 二、總持寺祖院所蔵『黄檗版一切経』予備調査報告

### （一）はじめに

本稿は、總持寺祖院（石川県輪島市、以下、祖院）に所蔵される、『黄檗版一切経』（以下、黄檗版）についての予備調査報告である。祖院所蔵の黄檗版については、二〇一二年から二〇一三年頃に作成されたエクセルデータの目録（以下、『二〇一三年目録』）があり、その概要を把握することはできる。しかし、この目録では詳細な書誌情報は採録されていないため、その印刷年代等は不明であった。そのため、二〇一九年九月十七日から十八日にかけての、鶴見大学仏教

文化研究所の祖院調査に同行させて頂いた際に予備調査を行った。非常に限られた時間での調査ではあったが、いくつかの新たな知見が得られたため、それについてまとめておくことで、今後の調査の参考資料としたい。

## （二）祖院所蔵黄檗版の現状と管理

祖院に所蔵される黄檗版は、元々は経蔵に納められていた。経蔵の建設やそのための勧化については、圭室文雄氏が、『總持寺祖院古文書を読み解く』（以下、『圭室書』）に「経蔵（輪蔵）の建立」としてまとめている。それによれば、経蔵は延享二年（一七四五）頃に完成したもので、数度の火災を乗り越えて現存する、江戸期の建築物の一つである。経蔵内にある輪蔵の概要について、圭室氏の説明を引用して示すと以下のとおりである。

⑪回転する輪蔵は八角柱で八面あり、一面は三列で七段の引き出しがあり、合計で一六八箱です。この中に約二、二〇〇冊の鉄眼版一切経が収納されています。若干ながら天海版もあります。これを購入したのは総持寺境内観音堂住の萬元和尚でした。（『圭室書』二二四頁）

しかし、黄檗版は現在は経蔵ではなく、山内の近隣にある白山蔵の二階に、整理の上、中性紙箱に納められた上で保管されている。管理用番号として「輪蔵No.・面・列・順」が付されて整理されており、輪蔵内の引き出しに収蔵されていた状態を再現できるようになっている。そして恐らく、『二〇一三年目録』は移動の際に作成されたのであろう。

黄檗版の保存状態は、おおよそ問題なく、本文の虫損・欠損も少ないが、一部題簽が剝がれかかっているものが確認される。資料の欠本は、『二〇一三年目録』によれば以下の通りである。しかし、目録全体を確認した限りでは、暫定的かつ短期間で作成された様子が垣間見え、再調査によって訂正される可能性は高い。なお、資料名の下のカッコ内は、（輪蔵No.―面―列―順）の順で記載した。

『大般若波羅蜜多経』巻二一～二五（五―仏―イ―一）、同巻二五一～二七〇（一〇二―仏―ロ―二の一）
同巻三八六～四一〇（一六三―仏―ロ―六）、同巻四一一～四二〇（一六五―仏―ロ―七の一）
同巻四七六～五一〇（一九二―仏―ハ―二の一）
『禅宗頌古聯珠通集』巻一～二四（二八六―日―二―三）、『大宝積経』巻九七～一一二（二九六―日―ニ―四）
『大方広仏華厳経』巻一～二四（三九六―日―ホ―四の二）、『摩訶僧祇律』巻一～一九上（九七一―輝―ヲ―一）
『大智度論』巻三～五（一〇七四―法―ワ―二）、『摩訶止観』巻一～二（一二〇九―法―カ―六）
『阿毘達磨大毘婆沙論』巻一二一～一三〇（一二一九―法―カ―七）
『陀羅尼雑集』巻一～七（一五一〇―輪―レ―七）、『法苑珠林』巻八八～九七（一五九〇―輪―ソ―六）
『景徳伝灯録』巻一～九（一七四〇―常―子―三）、『大方広仏華厳経』巻二一～三六（一八七九―常―ナ―六）
『大方広仏華厳経疏演義鈔』巻二〇～三六（一九六六―常―ラ―五の一）
『大明三蔵法数』巻一八～二三（二〇八八―常―ム―六）

### （三）調査の概要と黄檗版の特異性

続いて、調査の概要について説明する。近年、黄檗版の研究成果を積極的に発表している松永知海氏は、その印刷年代を特定する方法として、①刊記の有無による刊記の彫刻時期、②改刻時期により和刻本の入れ版を明・万暦版の底本とした覆刻本に変えているかどうか、③黄檗版大蔵経の未刻・改刻の事例から摺印時期を特定する方法、の三点を挙げている（「黄檗版『大般若経』の補版・改刻について」六八〇頁）。今回の調査では、黄檗版の最大の特徴である②に

ついて確認することで、年代の比定を試みた。

黄檗版は、江戸時代前期に、黄檗宗の鉄眼道光（一六三〇～一六八二）が開版した大蔵経で、鉄眼版とも称される。通説では、寛文九年（一六六九）に鉄眼が、黄檗山万福寺（京都府宇治市）開山隠元隆琦（一五九二～一六七三）より『万暦版一切経』（嘉興蔵）の寄進を受け、これを底本に開版事業が開始された。その後、延宝六年（一六七八）に、初刷本が後水尾天皇（一五九六～一六八〇）に献納され（現在正明寺〈滋賀県蒲生郡日野町、黄檗宗〉蔵）、名目上の完成年は、鉄眼示寂の前年の天和元年（一六八一）とされている。その版木四八二七五枚は、現在も万福寺塔頭宝蔵院に所蔵され、必要に応じて印刷が続けられており、昭和三十二年（一九五七）に重要文化財指定されている。

しかし、各寺に所蔵されている黄檗版を詳細に点検すると、その中に、嘉興蔵とは明らかに版式が異なる典籍があることが明らかになってきた。その理由は、黄檗版は当初、町版として既に出版されていた典籍は、その版木を買い取って、嘉興蔵の代わりに暫定的に使用していたためである。このような、和刻本による嘉興蔵の代用典籍を、松永氏は「入れ版」と称している。これは、本稿で取り上げる『大般涅槃経』・『大智度論』や、『景徳伝灯録』等、仏典・禅籍等の分野を問わずに行われている。その後、徐々に入れ版を嘉興蔵を底本としたものに置き換えており、江戸時代後期に印刷されたものでは、ほぼ全てが嘉興蔵に基づいたものになっている。また、嘉興蔵が底本であっても、訓点を付している場合や、『法華経要解』等の、高麗版を底本にしているものも存在する。[1] そして、この「入れ版」の問題によって、「黄檗版」の定義そのものが改めて問われることになったのである。

今回の調査は、松永氏の「『黄檗版大蔵経』の刊行について」を参考に実施した。松永氏は、六箇所の寺院・機関[2]に所蔵されている黄檗版の入れ版の状況を、九点の典籍を比較して異同を明らかにしており、必要に応じて典籍の写真も掲載している。今回は、その調査結果との比較を通して、祖院の黄檗版がどの寺院・機関の所蔵本に近いかを判断した。松永氏の調査結果は一覧表にまとめられているため（六一〇頁）、それを転載しつつ、祖院の状況を最上段に置

いた上で再編したものが以下の表である。なお、表中の祖院の項目で「不明」とした箇所は、『二〇一三年目録』では存在が確認されているが、今回の調査では確認できなかったものである。しかし、散逸しているのか、発見できなかったのか明らかでないため、本稿では暫定的に「不明」とした。また「経典番号」は、『昭和法宝総目録』二の『大明三蔵聖教北蔵目録』に付されているもので、おおよその目録に共通して採用されている通し番号である。

| | 経典番号 | 経典名 | 祖院 | 正明寺 | 法然院 | 月山寺 | 真別所 | 貞照院 | 上越大 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | 一〇九 | 大般涅槃経 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 和刻 | 和刻 | 和刻 | 万暦 |
| (2) | 一一六三 | 大智度論[3] | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 |
| (3) | 一一九〇 | 成唯識論 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 |
| (4) | 一四六七 | 諸経要集 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 和刻 | 欠本 | 万暦 | 万暦 |
| (5) | 一四九六 | 大唐西域記 | 不明 | 和刻 | 万暦 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 |
| (6) | 一五二七 | 妙法蓮華経玄義[4] | 万暦 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 | 和会本 | 万暦 |
| (7) | 一五二八 | 法華玄義釈籤 | 不明 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 | 和会本 | 万暦 |
| (8) | 一五二九 | 妙法蓮華経文句 | 不明 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 | 和会本 | 万暦 |
| (9) | 一五三五 | 大乗止観法門 | 万暦 | 和刻 | 和刻 | 万暦 | 万暦 | 万暦 | 万暦 |

この対照表から判断すると、祖院所蔵本は、月山寺（茨城県桜川市、天台宗）・真別所（和歌山県伊都郡高野町、高野山大学図書館寄託保管）所蔵本と一致する傾向にあることが明らかになった。この内、月山寺については、『曜光山月山寺

了翁寄進鉄眼版一切経目録』として調査報告が刊行されている（以下、『月山寺目録』）。

月山寺に黄檗版が納入された時期は、黄檗版の納品記録『全蔵漸請千字文朱点』簿（以下、『朱点簿』）によれば通番五三[5]で、貞享三年（一六八六）と元禄五年（一六九二）に二回の計三分割で納品されている。真別所は通番三五で、貞享三年から元禄四年にかけての計五分割で納品されている。『朱点簿』は、年代が明らかなもので言えば、天和四年（一六八四）から昭和十五年（一九四〇）にかけての計二三四三箇所への納品記録であるが、月山寺・真別所共に、最初期に納品されたものであることが分かる。因みに、これらと同時期に納品された曹洞宗寺院として、通番四八の吉祥寺（東京都文京区）が挙げられ、貞享三年から同五年（一六八六～一六八八）にかけての計四分割で納品されている[6]。そして祖院所蔵本も、これらと同時期に刷られ、納品された、比較的最初期の版であると考えられる。

## （四）調査結果の検討と今後の課題

最後に、今回の調査結果から新たに生まれる疑問点を記し、今後の課題を示しておきたい。

まず、経蔵の建立時期と、今回明らかにした、黄檗版の印刷・納入時期にずれがあることである。月山寺・真別所の黄檗版は貞享から元禄年間頃に納品されているので、祖院にも同時期に納品されたとすれば、実際に経蔵が完成するまでには約五〇年の間隔がある。今回調査における筆者の主目的であった、總持寺及び五院の江戸期の校割帳（計十六冊）を参照する限りでは、経蔵建立以前に黄檗版が所蔵されていた痕跡は確認出来なかった。

次に、『朱点簿』に「能登總持寺」の名が見えないことである。「総持寺（惣持寺）」の記載は五箇所確認できるが、何れも曹洞宗以外の寺院で、国名も「能登」ではない[7]。

以上の問題を解決するための可能性として、祖院の黄檗版は、他の所蔵者から購入、あるいは移したものであると

いうことが考えられる。『朱点簿』から、元の所蔵者の候補として、能登・加賀等の近隣地域の曹洞宗寺院を探すと、二箇寺が挙げられる。

第一は、通番五八の、「賀州金沢　購入者記載なし　①丁卯ノ四月十日　全蔵請了印〈張り紙あり、下に「貞享丁卯（四年、一六八七）六月三日奥州津軽耕春菴全蔵請了」〉」である。「津軽耕春菴」は、耕春院（青森県弘前市、現在の寺名は耕春山宗徳寺）[8]のことで、現在の金沢市内に所在した、本寺の宗徳寺に納めた、ということであると考えられる。耕春院自身も、続く通番五九に記載されており、同年の六月に納品されている[9]。そのため、耕春院が本寺の分も合わせて購入したのであろう。第二は、通番六三の桃雲寺（石川県金沢市）で、耕春院・宗徳寺と同年の、貞享四年八月に納品されている。

そして、この宗徳寺、あるいは桃雲寺に所蔵されていた黄檗版を、祖院に移したのではないかと考えられる。そうであれば、納品時期も両者共に、月山寺・真別処・吉祥寺と近いため、先に挙げた疑問点は一応両方解決できる。可能性がより高いのは、経蔵の勧化に応じている桃雲寺（『圭室書』二〇一頁参照）かと思われるが、現時点では確定は困難である。今後の再調査の際に、宗徳寺や桃雲寺、あるいはそれ以外の、元の所蔵者を示す識語が確認できる可能性もあり、関連文書の精査も含めて、留意点として挙げられる。

また、冒頭で引用した『圭室書』に、収納経典の中には「若干ながら天海版もあります」という記載について、この理由も明らかではない。可能性としては、『圭室書』の主要参照資料の書名に「諸嶽山輪蔵再興勧化簿」（後述）とあるため、経蔵・輪蔵は再建されたものである、ということが考えられる。つまり、祖院には天海版を納めた経蔵があり、それが火災等の何らかの事情で失われてしまったため、黄檗版を施入し、経蔵も再建したということである。曹洞宗においては、永平寺（福井県吉田郡永平寺町）に天海版が所蔵されている[10]ので、両本山たる總持寺にも元来所蔵されていたとしても何ら不思議ではない[11]。但し、「諸嶽山惣持禅寺新営転輪蔵募縁叙」（「輪蔵勧化簿」〈後述〉所収）には、それを示唆する文言はない。そのため、今後の検討課題の一つである。

さらに、冒頭で引用した『圭室書』に見える、黄檗版の購入者の「総持寺境内観音堂住の萬元和尚」については、この最後の結論の箇所が初出で、本文中では言及がない。圭室氏の検討の中心資料である、享保二十一年「諸嶽山輪蔵再興勧化簿」（「遠忌・勧化」一二二）、寛保二年（一七四二）秋「輪蔵勧化簿」（「遠忌・勧化」一四四）を参照しても、購入者が「万元」であることは特定できない。「万元」については、輪蔵の勧化者に「高雄万元」とある。[12]「高雄」は地名であり、神護寺（京都府京都市）の周辺がそのように呼ばれているが、関連性は不明である。総持寺の関係者としては、天明三年（一七八三）に洞泉庵に住持し、總持寺に二八九〇〇世として瑞世した、龍穏院（福島県田村郡三春町）二十六世万元一如がいるが、[13]この人物かは特定できておらず、今後の課題である。

本調査の際には『二〇一三年目録』を基礎にしつつ、『月山寺目録』を第一の参考文献とし、特に入れ版については、「〈表五〉異版・異柱一覧」（一八六～一八七頁）としてまとめられているため、それとの異同を確認することで、最も効率の良い調査が行えるであろう。その上で『二〇一三年目録』を訂補して公開し、成果を広く利活用できるようにすることが必要である。以上の点を確認した上で、本稿で挙げた今後の課題を再検討することを期しつつ、結びとしたい。

注

（1）以上の黄檗版の説明に関しては、松永知海「『黄檗版大蔵経』の再評価」（一三一～一三三頁）、『月山寺目録』（一六四～一六五頁）、會谷佳光「和刻本『大明三蔵聖教目録』諸本再考」（一五三頁）等を参照した。松永氏論文の「宝蔵院所蔵版木分類図」（一六一頁）によって、黄檗版の全体像を把握できる。また『法華経要解』については、『月山寺目録』（二三〇頁写真53、二三一頁写真54）参照。

（2）真別所・貞照院以外は目録が刊行されている。【参考文献】参照。

(3) 本稿末【図版4】と「『黄檗版大蔵経』の刊行について」所収の写真（六一六頁③④）参照。
(4) 本稿末【図版5】と『月山寺目録』所収の写真（二二五頁34）参照。
(5) 以下の「通番」は、『『全蔵漸請千字文朱点』簿による『黄檗版大蔵経』流布の調査報告書』に基づく。
(6) 拙稿「瞎道本光の依用典籍と著作間の相互関係について」五八三頁参照。
(7) 通番一一六（和歌山県和歌山市、西山浄土宗）、通番三七七（群馬県太田市、真言宗豊山派）、通番五〇〇・一八八七（大阪府茨木市、高野山真言宗）、通番一〇三五（兵庫県豊岡市、高野山真言宗）。
(8) 『日本歴史地名大系』「宗徳寺」項によれば、明治に入って、宗徳寺・耕春院ともに荒廃したが、大正元年（一九一二）に耕春院を復興する際に、耕春院に本寺の宗徳寺を合併し、耕春山宗徳寺と改称した。
(9) 耕春院の黄檗版は、「元禄十三年十二月十五日、仏殿及ビ蔵経七千余巻、雑書二千余巻、一時ニ回禄スヽ、惜乎（イカナ）」（皆川義孝『『曹洞諸寺院縁起志 全』』八頁）とあるため、焼失してしまったようである。
(10) 永平寺の天海版については、笛岡自照『永平寺雑考』「祖山所蔵の一切経とその寄進者」、『永平寺史料全書』文書編二№33「一切経献納碑銘」参照。
(11) 天海版の所蔵寺院としては、椎名宏雄氏が挙げている、「滋賀叡山文庫・京都西本願寺・同本国寺・同青蓮院・和歌山雲蓋院・福井永平寺・東京海禅寺・埼玉喜多院・栃木輪王寺」（『宋元版禅籍の研究』三四〇頁）の他、実相寺（静岡県富士市）、仁和寺（京都府京都市）、寛永寺（東京都台東区）、久遠寺（山梨県南巨摩郡身延町）、池上本門寺（東京都大田区）等がある。何れにせよ、各宗派の本山級寺院や僧録などの重要寺院に納められていることがわかる。
(12) 「諸嶽山輪蔵再興勧化簿」四丁表。「輪蔵勧化簿」には記載ナシ。『圭室書』には「高尾万元」（二〇一頁）とあるが訂正しておく。

（13）『曹洞宗大本山總持寺五院輪住帳』一五六頁、『曹洞宗全書』大系譜一〇四五頁。

付記　本稿執筆に際して、所蔵資料の使用を許可頂きました、總持寺祖院監院鈴木永一老師、また調査の際にお世話になりました、總持寺祖院、鶴見大学仏教文化研究所各位には誌して感謝申し上げます。

【参考文献】

『昭和法宝総目録』二（大蔵出版、一九二九年四月）
笛岡自照『永平寺雑考』（古径荘、一九七三年四月）
『上越教育大学所蔵黄檗鉄眼版一切経目録』（上越教育大学附属図書館、一九八八年三月）
『獅谷法然院所蔵麗蔵対校黄檗版大蔵経並新続入蔵経目録』（佛教大学仏教文化研究所、一九八九年十二月）
松永知海「『黄檗版大蔵経』の再評価」（『仏教史学研究』第三十四巻第二号、一九九一年十月）
椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（大東出版社、一九九三年八月）
内山純子・渡辺麻里子編著『曜光山月山寺了翁寄進鉄眼版一切経目録』（曜光山月山寺、二〇〇一年五月）
松永知海「『黄檗版大蔵経』の刊行について」（『高橋弘次先生古稀記念論集浄土学佛教学論叢』、山喜房佛書林、二〇〇四年十一月）
『後水尾法皇下賜正明寺蔵初刷『黄檗版大蔵経』目録』（佛教大学総合研究所、二〇〇四年十二月）
松永知海編『『全蔵漸請千字文朱点』簿による『黄檗版大蔵経』流布の調査報告書』（佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇八年三月）
圭室文雄『總持寺祖院古文書を読み解く――近世曹洞宗教団の展開――』（曹洞宗宗務庁、二〇〇八年十月）

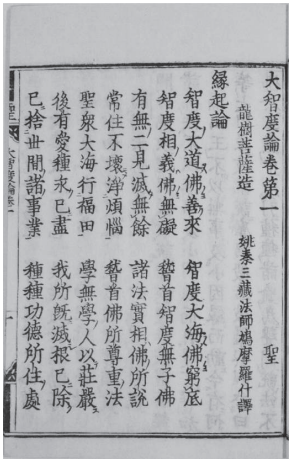
會谷佳光「和刻本『大明三蔵聖教目録』諸本再考」（『東洋文庫書報』第四十二号、二〇一〇年三月）
皆川義孝「『曹洞諸寺院縁起志 全』」（『駒沢女子短期大学研究紀要』第四十四号、二〇一一年三月）
納冨常天編著『曹洞宗大本山總持寺五院輪住帳』（大本山總持寺、二〇一六年三月）
松永知海「黄檗版『大般若経』の補版・改刻について」（『印度学仏教学研究』第六十四巻第二号、二〇一六年三月）
『永平寺史料全書』文書編二（大本山永平寺、二〇一七年二月）
拙稿「瞎道本光の依用典籍と著作間の相互関係について――『拈評三百則方語解』を中心として――」（『印度学仏教学研究』第六十七巻第二号、二〇一九年三月）

以上、秋津（文責）

【図版1】祖院経蔵外観

【図版2】祖院経蔵内輪蔵

【図版3】祖院白山蔵外観



大智度論卷第一

龍樹菩薩造　聖

姚秦三藏法師鳩摩羅什譯

緣起論

智度大道佛善來　智度大海佛窮底

智度相義佛無礙　稽首智度無子佛

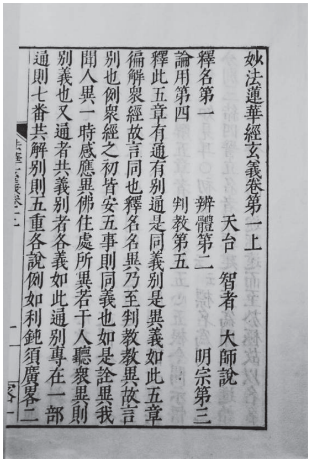
有無二見滅無餘　諸法實相佛所說

常住不壞淨煩惱　稽首佛所尊重法

聖衆大海行福田　學無學人以莊嚴

後有愛種永已盡　我所既滅衆已除

已捨世間諸事業　種種功德所住處



妙法蓮華經玄義卷第一上

天台　智者　大師說

釋名第一　辨體第二　明宗第三

論用第四　判教第五

釋此五章有通有別通是同義別是異義如此五章

徧解衆經故言同也釋名名異乃至判教教異故言

別也例衆經之初皆安五事則同義也如是詮異我

聞入異一時感應異佛住處所異若干人聽衆異則

別義也又通者共義別者各義如此通別專在一部

通則七番共解別則五重各說例如利鈍須廣畧二

【図版5】『法華玄義』巻1上

【図版4】『大智度論』巻1

（あきつ　ひであき・曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員）

（たけい　しんご・仏教文化研究所研究生）